

チヨホナミの施肥反応

鴫田 広身・渡辺 善弘*

(宮城県古川農業試験場・*古川農業改良普及所)

Growth Response of New Rice Cultivar "Chiyohonami" to Fertilizer Application

Hiromi TOKITA and Yoshihiro WATANABE*

(Miyagi Prefectural Furukawa Agricultural Experiment Station・)
*Furukawa Agricultural Extension Service Station

1 はじめに

チヨホナミは、アキホマレ(母)の良質・良食味と、コガネヒカリ(父)の強稈・耐冷・多収の特長を合せ持つ品種である。

宮城県は、県南部平垣及び西部丘陵地帯の標高100m以下に作付されているササミノリと、不適地に作付されているササニシキに代る品種として、昭和62年奨励品種に採用した。県では、うまい米の生産地としての声価を今後とも維持していくため、昭和65年までに県全体の作付面積の10%に当たる10,000haに普及させる計画である。

そこで、本品種の優れた特性を発揮させ、良質で安定多収を上げる栽培法の目安を得るため、品種特性が施肥条件によりどのような反応を示すか検討したので、得られた結果について報告する。

2 試験方法

- (1) 試験年次: 昭和60年～62年
- (2) 試験場所: 宮城県古川農業試験場
- (3) 供試土壌: 灰色低地土 細粒強グライ
- (4) 供試条件

(単位: kg/10a)

基肥 N量	追肥時期及びN量		備 考
	穂首分化期	減数分裂期	
5.5	0	0	P, Kは全量基肥 P: 15kg, K: 11kg 62年の穂首分化期追肥時期は幼穂形成始期。 基肥 7.0 は 60年のみ。
5.5	2	0	
5.5	0	2	
5.5	2	2	
7.0	2	0	
7.0	0	2	

- (5) 比較品種: ササミノリ, ササニシキ
- (6) 耕種概要: 箱当たり180g播き稚苗を5月8日前後に移植, 栽培密度30.0×15.0cm, 22.2株/m², 栽植本数5本/株, 手植え。
- (7) 試験規模: 1区10m², 2区制

3 試験結果

表1に示したようにチヨホナミの出穂期は1日, 成熟期は2日程度それぞれササミノリより遅かった。また, 施肥

表1 施肥別出穂期, 成熟期, 稈長, 穂長及び倒伏程度

品 種 名	基 穂 減 肥 首 分 (N kg/10a)	出 穂 期 (月日)	成 熟 期 (月日)	稈 長 (cm)	穂 長 (cm)	倒 伏 程 度
チ ヨ ホ ナ ミ	5.5-0 0	8.10	9.23	69.8	16.4	無
	5.5-2 0	8.11	9.24	74.6	17.4	無
	5.5-0 2	8.11	9.24	74.4	17.4	無
	5.5-2 2	8.11	9.25	77.5	18.0	無
	7.0-2 0	8. 8	9.24	78.0	18.2	無
	7.0-0 2	8. 8	9.23	78.0	18.4	無
サ サ ミ ノ リ	5.5-0 0	8. 9	9.21	75.2	16.1	無～微
	5.5-2 0	8. 9	9.22	80.4	17.3	少～多
	5.5-0 2	8.10	9.22	78.8	16.5	無～微
	5.5-2 2	8.10	9.22	81.3	17.5	少～中
	7.0-2 0	8. 7	9.21	85.0	17.3	中
	7.0-0 2	8. 6	9.20	83.0	17.5	中
サ サ ニ シ キ	5.5-0 0	8.13	9.28	75.8	16.2	少
	5.5-2 0	8.13	9.28	80.8	16.6	中
	5.5-0 2	8.12	9.28	77.8	16.9	少～中
	5.5-2 2	8.13	9.30	82.4	17.3	中～多
	7.0-2 2	8.12	9.27	87.0	17.7	多
	7.0-0 2	8.11	9.27	87.0	18.7	多

注 基肥 5.5 の各区は60年～62年の3か年平均7.0区は60年

法による出穂期, 成熟期の変動は, ササミノリ, ササニシキと同様に小さかった。稈長は, ササミノリ及びササニシキより短く, 穂首分化期の追肥により伸長するが, 耐倒伏性は強く, 試験の範囲では倒伏は全く認められなかった。

図1に施肥法と収量及び収量構成要素, 図2に粒数と登熟歩合, 図3に粒数と収量の関係を示した。穂数, 粒数及び玄米千粒重は共にササミノリとササニシキの中間であり, 穂首分化期の追肥は穂数及び一穂粒数を, 減数分裂期の追肥は一穂粒数をそれぞれ増加させたが, その傾向は基肥多肥条件で顕著であった。登熟歩合はササミノリより低いが, ササニシキより明らかに高く, 粒数増加に伴う登熟歩合の低下はササニシキより緩やかであった。したがって, 基肥多肥又は追肥により粒数の増加を図るとササミノリ, ササニシキより多収となり, 更に粒数の増加を図ることによりかなりの多収が期待できると推察された。

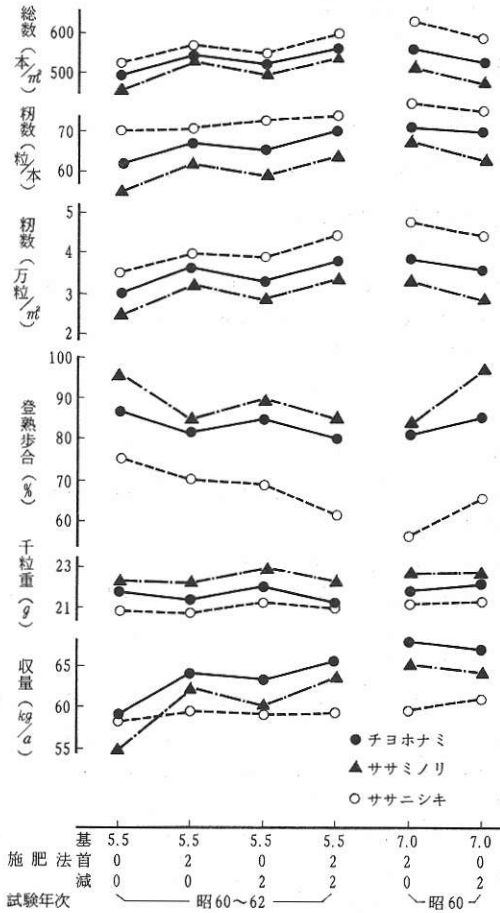


図1 施肥法と収量及び収量構成要素

表2 施肥法と枝梗数, 粒厚 1.8mm以下の玄米比率及び外観品質

品種名	基肥 (N kg/10a)	穂首分 (減)	枝梗数		二次/ 一次比 (%)	玄米粒厚 1.8mm以下 比率(%)	外観 品質
			一次 (本)	二次 (本)			
チヨホナミ	5.5-0	0	7.5	8.5	113	3.6	中上
	5.5-2	0	7.5	9.8	131	6.0	中中
	5.5-0	2	7.3	9.0	123	4.8	中上
	5.5-2	2	7.9	10.6	134	6.1	中中
ササミノリ	5.5-0	0	7.8	7.1	91	1.5	中上
	5.5-2	0	8.4	7.8	93	3.9	中上
	5.5-0	2	7.6	6.1	80	1.6	中上
	5.5-2	2	8.3	7.8	94	2.6	中中
ササニシキ	5.5-0	0	8.1	9.7	120	7.4	中中
	5.5-2	0	7.9	10.7	135	7.8	中中
	5.5-0	2	8.0	10.5	131	6.9	中中
	5.5-2	2	8.4	11.3	135	8.1	中下

注 枝梗数は61年62年の平均。玄米粒厚比率及び品質は62年

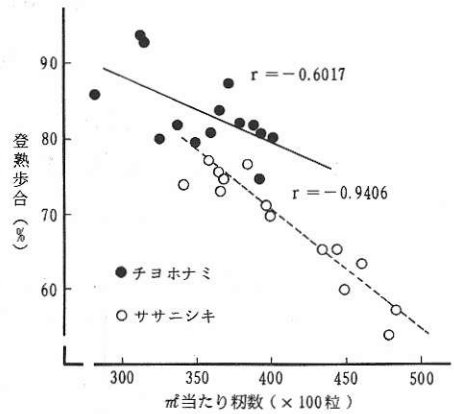


図2 m²当り粒数と登熟歩合 (昭和60~62年)

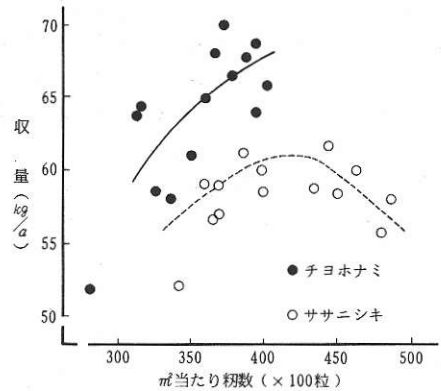


図3 m²当り粒数と収量 (昭和60~62年)

表2に枝梗数, 粒厚1.8mm以下の玄米比率及び外観品質を示した。一次枝梗数に対する二次枝梗数の割合はササニシキ並に多く, 穂首分化期の追肥で二次枝梗が多くなる傾向がみられた。また, 穂首分化期の追肥で二次枝梗の割合が多くなると粒厚のうすい玄米の比率が高まり, 玄米千粒重が小さくなり, 品質は青未熟粒等の増加で低下する傾向がみられた。

4 ま と め

チヨホナミは, 粒数の増加を図るとかなりの多収が期待されるが, 穂首分化期頃の追肥により粒数の増加を図ろうとすると, 二次枝梗の割合が多くなり, 千粒重及び品質が低下する傾向がある。耐倒伏性はかなり強く, 穂数は比較的確保しやすい品種なので, 基肥量の増加及び初期生育の促進による穂数増加で粒数確保を図るのが, チヨホナミの特性を生かした良質, 多収栽培法と考えられる。